菊水小学校　学校だより　第８号

『みんなの笑顔のために』

Ｒ４．７．８
文責　井上雄治

たった一言で・・・

言葉は大きな力を持っています。たった一言でも相手を笑顔にすることもできるし、悲しい気持ちにさせることもできます。

私は三歳の頃、大やけどをしました。小学生の頃、そのやけどのことをバカにする一言は、何十年も経過した今でも忘れることができません。それだけ人の心に残るのです。

学校で生活していると、そのような人を傷つける言葉を平気で使っている場面に出くわすことがあります。たった一言でも、一度相手の耳に届いた言葉を消すことはできません。たった一言でも、ずっと相手の心に残るのです。だからこそ、あたたかいやさしい言葉を交わしながら友だちとつながっていけるよう、子どもたちと言葉の大切さについて考えていきたいと思っています。

「ひとつのことば」　北原白秋

ひとつのことばで　けんかして
ひとつのことばで　なかなおり
ひとつのことばで　頭が下がり
ひとつのことばで　心が痛む
ひとつのことばで　楽しく笑い
ひとつのことばで　泣かされる
ひとつのことばは　それぞれに
ひとつのこころを　持っている
きれいなことばは　きれいな心
やさしいことばは　やさしい心
ひとつのことばを　大切に
ひとつのことばを　美しく

「ありがとう」

このことばは、人を思いやる言葉です。

気持ちのよいあいさつは人間関係をなごやかにし親しみを生みます。ところが、日本人はあいさつが下手だともいわれます。「ありがとう」という言葉の意味について考えてみます。

「有難う」は「有ることが困難です。」つまり、「めったにあることではありません。」という意味です。「このようなご親切は、なかなかあるものではありません。」という丁寧な心がこもっているのです。人間関係を重んじた、わたしたちの先祖の温かい心が遺した言葉なのです。この温かい心をいつまでも引き継いでいきたいものです。

「ありがとう」で世界が変わる！

ある日曜日、久しぶりに一家団欒の静かな朝、二人の子どもと夫婦がお茶を飲みながら狭いながらも楽しいわが家のひとときを過ごしていました。そのとき、突然という感じでガガガガッという耳をつんざく騒音が始まりました。

「ヤヤッ」「何だ！」という感じである。すぐそばで何やら工事が始まったのだ。

とにかく家族の声が聞き取れない。静かな団欒どころではなくなった。

「まあ、ひどいなあ。日曜日なのに、こんな騒音をたてて、いいと思っているの！」「まったく非常識もはなはだしい！」「そうだね何の工事か知らないが、日曜日にやるのは迷惑だ」とお父さんと子どもたちは不満をぶつけあった。

それを聞いていたお母さんが、次のようにつぶやいた。「あの工事をしているおじさんたちもご家族があるでしょうに。日曜日なのですから、家に居て皆とお茶を飲みながら、一家団欒したいでしょうに、私たちの街のために工事して下さるって、**ありがたい**ことだねェ」これはお父さんと子どもたちにはまさに晴天の霹靂（へきれき）だった。ハッと思ったらさっきまで耐えられなかった騒音が、そんなでもなくなった。不思議である。同じ騒音なのに、**心のフィルムを替えてみると、受け取り方の違いによって、世界がまるで違って見えるのである。**　（財団法人熊本県教育弘済会・熊本県教育公務員弘済会会報　より）